

各 位

武雄・杵島地区農業指導連絡協議会
杵島農業振興センター

「稲作情報（第13号）」について（送付）

このことについて、下記のとおり「稲作情報（第13号）」を送付しますので、業務の参考にしてください。

1. 気象概況

月	半旬	平均気温			最高気温			最低気温			降水量			日照時間		
		平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (mm)	R6 (mm)	平年比 (%)	平年 (hr)	R6 (hr)	平年比 (%)
7月	1	25.4	27.6	2.2	29.2	30.6	1.4	22.4	25.1	2.7	90.3	147.5	163.3	16.3	21.4	131.3
	2	26.1	29.3	3.2	30.1	32.4	2.3	23.0	26.9	3.9	83.2	2.5	3.0	20.3	33.5	165.0
	3	26.7	24.9	-1.8	30.9	27.5	-3.4	23.5	22.8	-0.7	61.9	195.5	315.8	24.2	4.8	19.8
	4	27.3	28.5	1.2	31.8	32.8	1.0	23.9	25.3	1.4	43.1	4.0	9.3	28.0	30.8	110.0
	5	27.7	29.5	1.8	32.5	34.6	2.1	24.2	26.3	2.1	36.2	5.5	15.2	31.4	39.9	127.1
	6	28.1	29.8	1.7	33.0	35.0	2.0	24.5	25.8	1.3	39.2	0.0	0.0	41.0	66.2	161.5

○7月6半旬の平均気温は、平年に比べて1.7°Cほど高く推移した。また、降雨はなく、日照時間は平年比165%となった。

2. 水稻情報田の生育状況（調査日：8月1日）

項目 品種(設置場所)	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	主稈 出葉数L	葉色 SPAD	概 要
さかびより 6/20 移植 武雄市橋町 ※2	本年値	75.2	443	11.5	40.1	<ul style="list-style-type: none"> 草丈は平年より高く茎数は平年並。 主稈出葉数は平年より0.1葉多い。 葉色は濃く、SPADは平年より0.5高い
	前年値	64.8	436	11.4	40.1	
	平年値 ※2	66.3	441	11.4	39.6	
	平年比	113	100	+0.1	+0.5	

※1 さかびよりの平年値はH21～R5の平均値
※2 本年移植日6月20日 平年移植日6月22日

3. 管内の生育状況（8月1日時点）

- 1) 普通期水稻 : 分けつ盛期～穂ばらみ期である。
日照時間が長く推移したが、平年と比較し草丈は徒長している。また、深水管理された圃場では茎数が少なくなっている。

4. 今後の管理

1) 普通期水稻

- ・移植後、気温が高く推移したことで雑草発生が早く、場合によっては除草剤の効果が十分発揮できていない圃場も確認されている。特に「ホタルイ」の発生がみられる。その場合、中後期除草剤の散布も視野に入れる（剤によっては収穫前日数に留意して使用する）

- ・移植後の曇天多雨の影響を受けて、初期分げつが確保できず茎数不足の圃場も見られるが、中干し作業は、移植後35日～40日まで実施する（茎数が少なすぎる場合は軽めに行う）。なお、『中干し作業の効果と時期』については、稲作情報10、11号参照
- ・いもち病が多発している圃場では、強い中干しは避けるようにする。

① 夢しずく

- ・幼穂形成始期～穂ばらみ期を迎えている。
- ・幼穂形成期から出穂期にかけては要水量が増加する時期である。特に穂孕み期から穂揃期は湛水（浅水）管理とする。

② ヒノヒカリ

- 6月下旬に移植されたヒノヒカリは、まもなく幼穂形成始期を迎え穂肥施用時期となる。
下記の診断基準により穂肥診断を必ず行い、適期適量の施用につなげる。

【表1 ヒノヒカリの穂肥診断基準】

草丈 cm 幼穂形成始期時	葉 色		穂肥施用時期			
	群 落	SPAD	出穂前	幼穂長	穂肥施用量 (N成分)	
80cm以下	淡い	3.0以下	34以下	20～22日	1～2mm	3.0kg/10a
	標準	3.0～3.5	34～38	18～20日	3～5mm	3.0kg/10a
	濃い	3.5～3.8	38～39	16日	5～15mm	2.5kg/10a
	濃い	3.8以上	40以上	15日	15～30mm	1.0kg/10a
80cm以上	淡い	3.0以下	34以下	20～22日	1～2mm	2.5kg/10a
	標準	3.0～3.5	34～38	18～20日	3～5mm	2.5kg/10a
	濃い	3.5以上	38以上	穂肥は施用しない		

③ さがびより

- 穂肥の施用時期は、幼穂長10mmが基準となる。
幼穂長5mm以上になったことを確認してから、下表の診断基準により穂肥を施用する。

【表2 さがびよりの穂肥診断基準】

	幼穂形成始期の 草丈cm	葉 色		幼穂長	出穂前 日数	施用量 N成分kg/10a
		群 落	SPAD			
穂肥診断時	75cm以下 (標準)	2.5以下	33以下	5ミリ	20～18日	2.5kg
		3.0	33-37	10ミリ	18日	2.0kg
		3.5	37-38	15ミリ	16日	1.0kg
		3.8以上	39以上	施用しない		
	75cm～ 80cm	3.0以下	36以下	10ミリ～15ミリ	18～16日	1.5kg
		3.0以上	37以上	施用しない		
	80cm以上	施用しない				

3) 病害虫の発生状況

①いもち病

【普通期水稻】

- ・ 圃場内に放置されている補植苗は「いもち病」や「ごま葉枯病」の温床になるため、すみやかに除去する。
- ・ 葉いもちの発生に注意して観察し、進展型病斑が認められれば早急に臨機防除を実施する。その場合、オリブライト粒剤等を使用する（ただし農薬摘要に留意する）
- ・ 窒素過多は発生を助長するので、適切な肥培管理を行なう。
- ・ **葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみ期の防除を徹底するとともに、発生が多いと予想される場合（上位3葉に葉いもち病の病斑を確認した時）には穂揃い期にも防除を行う。**
薬剤の使用にあたっては、使用時期や回数等の農薬の登録情報に注意する。



葉いもち病の病斑
葉色が濃い圃場にて確認

②ウンカ類

- ・ 本年は、平年に比べ13日遅い、6月17日に梅雨入りとなり、梅雨前線に伴い海外飛来性害虫であるウンカ類が誘殺されている。トラップ調査や気象解析の結果から6月23日～24日頃、7月1日～2日頃、7月10～11日頃に主な飛来があったと考えられる。嬉野市の予察灯の誘殺数は過去10年で最も多い状況となっている(表3参照)。なお、最新情報は、佐賀県農業技術防除センターのホームページを参照すること。
- ・ 今後の飛来状況や圃場での発生状況(移植時期や品種、箱施用剤の種類、施用の有無、圃場の場所等)によってウンカ類の発生量や増殖率が異なるため、圃場での発生状況に注意する。

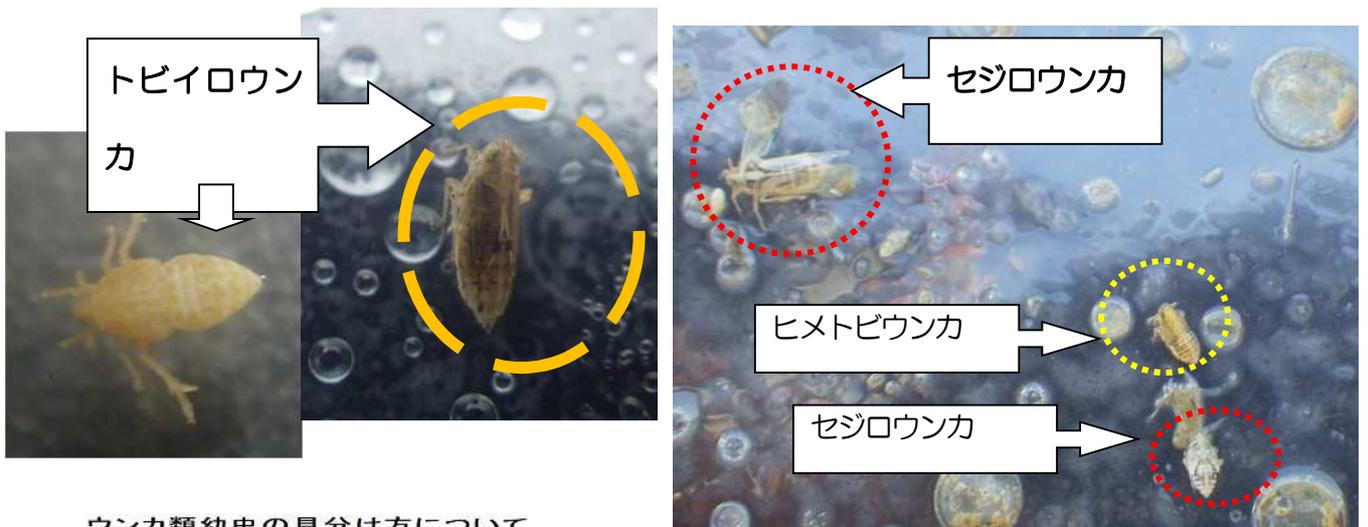
《表2 海外飛来性害虫(トビイロウンカ・セジロウンカ) 誘殺状況》 佐賀県農業技術防除センターHP 参照

月	日	トビイロウンカ					セジロウンカ				
		佐賀県		長崎県			佐賀県		長崎県		
		佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市
		ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5日	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	11日	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	12日	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	15日	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	16日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	17日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	18日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	19日	0	1	0	0	0	1	6	0	0	0
	20日	0	3	0	0	0	0	10	2	0	0
	21日	0	8	0	0	0	0	25	0	0	0
	22日	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0
	23日	0	24	0	0	0	25	66	8	1	1
	24日	0	14	0	0	0	13	92	5	0	2
	25日	0	1	0	0	0	0	148	1	0	0
	26日	0	9	0	0	0	0	187	0	0	0
	27日	0	3	0	0	0	2	8	0	0	0
	28日	0	7	0	0	0	0	30	4	0	0
	29日	0	4	0	0	0	3	31	2	0	0
	30日	0	13	0	2	0	15	5	0	3	0
7月	1日	0	229	0	0	0	14	88	0	1	0
	2日	0	41	0	0	0	0	97	0	0	0
	3日	1	欠測	0	0	0	1	欠測	0	0	0
	4日	0	5	0	0	0	0	3	0	0	0
	5日	0	0	0	0	0	5	9	0	1	0
	6日	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0
	7日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	8日	0	1	0	0	0	2	1	2	0	0
	9日	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	10日	0	2	0	0	0	1	252	1	2	0
	11日	0		0	0	0	1		106	0	0
	12日	0		0	0	0	0		33	0	0
	13日	0	3	0	0	0	0	933	232	0	0
	14日	0		0	1	0	0		70	0	0
	15日	0		0	0	0	0		17	0	0
	16日	0	0	0	0	0	0	24	0	0	0
	17日	0	0	0	0	0	0	6	2	0	0
	18日	0	0	0	0	0	0	35	1	1	0
	19日	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0
	20日	0	0	0	0	0	4	9	3	0	0
	21日	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0
	22日	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0

調査日	セジロウンカ		トビイロウンカ		ヒメビウンカ		備考
	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	
8月1日							
6/14移植	1	0	0	0	1	0	夢しずく(江北町) ※ゼクサロン系無施用
6/20移植	8	1	0	0	1	0	さがびより情報田



図1 トビロウカ各世代の発生予測 (第2版、2024年7月19日作成)



ウンカ類幼虫の見分け方について

	若齢幼虫の体色	中～老齢幼虫の体色	水面での後脚の出し方
セジロウカ	白っぽい	灰白の斑紋	: 真横
トビロウカ	白っぽい	薄茶か茶褐色	: 真横～やや斜め後ろ
ヒメトビウカ	黄褐色	淡黄色か薄茶か茶褐色 (体側の色が濃い場合あり)	: 斜め後ろ

4. 大豆の管理について

- 7月上旬ごろの晴れ間に播種された圃場では、本葉3～4葉期を迎えている。多くの圃場では播種作業は7月19以降となっており、出芽期を迎えている。

(1) 中耕・培土

- ①中耕・培土には様々な効果があり、積極的に収量を上げるための重要な作業である。

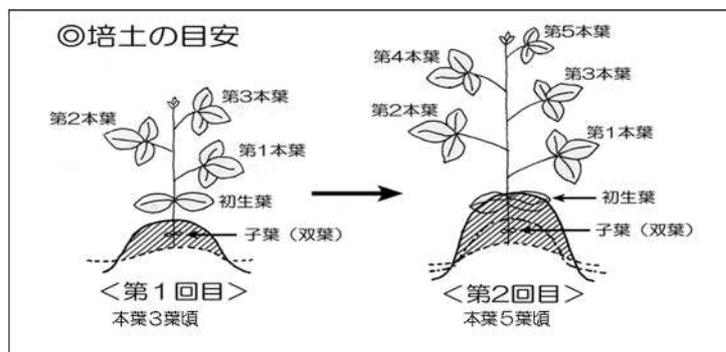
中耕・培土の主な効果

- 培土部分からの不定根の発生を促進し、養水分の吸収をよくする。
- 株元に土を寄せて、倒伏を防止する
- 土壌を膨軟にし、通気性を改善する
- 土壌を攪拌し、雑草の発生を抑える
(雑草を防除する)
- 畦が作られ、排水性が向上する
(表面排水を促進し湿害を受けにくくする)

- 1回目 (本葉2～3葉期) …生育初期の雑草防除、土壌中への酸素供給。
- 2回目 (本葉4～5葉期) …除草効果+土壌通気性向上
+新根発生促進 +倒伏防止。

※ 培土は開花1週間前までに終了すること！

- ②開花後の中耕は断根による悪影響が大きくなるので開花前に終わる。
- ③乾燥が続く場合には乾燥を助長するため行わない。



(2) 雑草対策

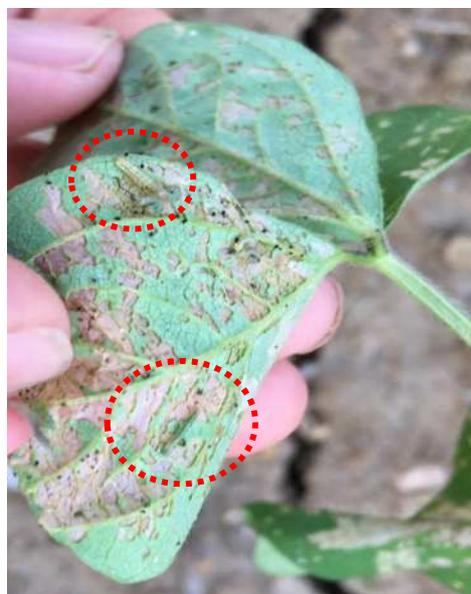
- ・出芽後の雑草対策としては、生育期除草剤となるので開花時期までに下記の除草剤で対策を行う。近年難防除雑草といわれる「アサガオ類」や「ホオズキ類」の発生が目立ってきている。以下に留意して適期防除につなげる。

- ①アサガオ類やホオズキ類等の難防除雑草は、圃場内の侵入を防止することが重要。
- ②難防除雑草が侵入した圃場は、土壌処理剤と茎葉処理剤を体系処理する。
- ③アサガオ類では、播種前のトレファノサイド乳剤の土壌混和処理や、大豆バサグラン液剤やアタックショット乳剤、パワーガイザー液剤等の茎葉散布等による防除が有効であるが、完全に抑えることは難しい。
- ④ホオズキ類では、リニュロンを含む土壌処理剤(ラクサー乳剤等)や、アタックショット乳剤による茎葉処理の効果が高い。

薬剤名	10a 当り 散布量	散布時期	使用上の注意
ポルトフロアブル	200～300ml	イネ科雑草 3～10葉期 収穫30日前まで	・イネ科雑草のみ（ズメカサガイ除く） ・イネ科雑草が完全に枯殺するには、 約1週間を要する。
パワーガイザー液剤 (畦間処理)	200～300ml	生育期 (雑草発生揃期～2葉期) 収穫30日前まで	・畦間処理を行い大豆にかからないよう に注意する。
バスタ液剤 (畦間処理)	300～500ml	収穫28日前まで	・畦間処理を行い大豆にかからないよう に注意する。
アタックショット乳剤	30～50ml	大豆2葉期 ～開花前	・一年生広葉雑草（ケイトウ、ホオズキ 等の広葉雑草に対し効果あり） ・散布薬量 100 $\frac{\mu\text{g}}{\text{L}}$ /10a ・雑草茎葉散布又は全面散布 ※大豆葉への薬害を生じやすい

(3) 病害虫防除（ハスモンヨトウ）

- ・8月中～下旬頃の白変葉が散見され始める時に1回目の防除を行い、その後は発生量に考慮して10～15日間隔で防除を行う。
- ・フェロモントラップを設置している地区やほ場においては、8月下旬～9月下旬にフェロモンによる誘殺数が増加するとほ場内の白変葉も増加する傾向がある。従って、フェロモントラップの誘殺数が急増した時に、ほ場での白変葉やハスモンヨトウの発生状況を調査して防除要否を判断する。
- ・ハスモンヨトウは1回目の適期防除を行っても、その後の追加防除はその年の気象条件やほ場によって異なる。特に、夏期が高温で経過し、大豆の生育が良好な年は、大豆白変葉の観察やフェロモントラップ調査をこまめに行い、防除が必要と判断された場合は、早急に追加防除を行う。
- ・農薬が茎葉内部及び着莢部に十分到達するように散布する。
- ・地上散布において展着剤としてササラを加用することで、調整時の泡立ちが抑えられるとともに、湿展性が向上する。



令和6年産 作物作付期間気象図
アメダス観測値(白石)

